

弔辞

吉田宏哲

峰島旭雄先生、本日、先生のご葬儀において弔辞をささげるにあたり、まずもつて私にその資格があるか否かと自問しております。と申しますのは先生が弱冠二一歳にして、廣度院の住職を拝命され、その後、早稲田大学、大正大学等で教鞭を執られながら著された四六〇点に及ぶ著書や論文。あるいは比較思想学会の設立から始まり、一二〇〇名もの会員を擁したこの学会の組織・運営・理論的指導、「比較思想辞典」編纂、そして早稲田大学・大正大学・文京女子大学等や三康文化研究所、芝学園での厳密で、しかも春風駘蕩たる教育、さらには浄土宗門において浄土宗教学の哲学的位置づけ、教学振興への提言、宗門子弟に対する研究指導等々。

これらのご業績を讀え、そのご遺徳を偲ぶには私などよりは、もつともつとそれに相応しい方々がいらつしやる筈だと思つてからであります。けれども、平成一〇年、年の暮れに、峰島先生からお電話を頂き、東京プリンスホテルに伺つたところ、突然、比較思想学会の会長にと仰せられ、翌年、選挙で選ばれてそのまま会長になってしまいました。先生が私を指名された理由は、おそらく昭和五五年に刊行された先生との共著である「仏教の

真善美聖」という書物があつたからではないかと推量しております。それに私の恩師である中村元先生が学会の創設者・初代会長であつたこと、また私が学会の事務局がある大正大学の教員であつたことなどもその理由に挙げられるかもしれません。しかし私は哲学科を出たものの、大正大学で真言学を学び、さらに東大の印哲で仏教学を学んだ後は、西洋哲学はほとんど門外漢になつてしまつて、とても比較思想の広大な領域には立ち入ることは出来ませんでした。それにもかかわらず、会長職を二期も務めてしまい、あまつさえこの度の先生のご葬儀に弔辞を捧げるといふ役目も引き受けてしまいました。

それ故、ここに奮勇をふるつて先生の学風について私の考えを述べさせていただきます。

幸い、今年の九月二〇日に「峰島旭雄選集」全三巻が北樹出版から刊行されました。ここには先生の学風を示す珠玉の論文が五五篇収録され、第3巻の末尾には先生の履歴と著書・論文が掲げられております。限られた時間でこれらを詳細に論ずることは出来ませんが、これらの著述を拝読して感ずる第一印象は、収録された全ての論文が、先生の哲学的あるいは比較思想

学的思索の結晶である、ということであります。ですからこれを實際に味わうにはこれらの論文を味読して先生の論理の世界に没入するしかない。そしてその論述の展開に陶醉する。それで終わり。ところが先生はいつでもそれで終わりということがないんですね。必ず論文の末尾にここまでやったがまだこれから先こういうやるべきことがあると云われる。それだから先生の学問には終わりが無い。結論がない。これは哲学とか比較思想という学問がその領域からして広大無辺であるからという理由の他にこれをなす人間が生きて哲学し、古今東西の思想を比較し、対比し、対決し、そして選択しているからでありましょう。ところがもしこのように常に新たな領域に手を伸ばして、比較し、対決していたのでは、くたびれてしまう。ところが先生は疲れを知らないように、次々と東西の哲学者・思想家の所説を涉猟し、その思想家の思想の先まで進ませてしまう。先へ進ませると申しましたのは、先生の所論がその取り上げる思想家の所論の限界と可能性とを鮮やかに描き出してしまおうからであります。「選集」第2巻に収録された明治・大正・昭和各時代の思想家の諸研究は、まさに先生の鮮やかな比較思想学的方法の成果の展覧であると云えます。

それ故、問題は先生の比較思想論的方法がどこから出てきたのかということになります。勿論、「比較思想論」そのものの日本における書物としての濫觴は、中村元先生のものであります。しかしながら東西の思想の比較ということになると、西洋

哲学の専門家でしかもそれに匹敵するあるいはそれを超える東洋の思想・宗教に対する理解を持った人物がいなければならなと思います。特に比較思想ということになると一九二三年にマソン・ウルセルが公刊した「比較哲学」を嚆矢とします。よってそのような事情に通じた峰島先生が中村先生の片腕として、比較思想学会を設立し、その学的環境の中で比較思想論的方法が自覚化されていったのであると思います。西洋の思想家としては、カントに始まるドイツ観念論哲学の系譜やヤスパース、フッサール、ハイデッガーやデュレイ等の思索や方法がその基礎としてあったのだと思います。先生の学問の始まりは大正大学哲学科であり、さらに早稲田大学で哲学を専攻されました。三二歳の時、中村先生の「比較思想論」の書評を書かれ、それが中村先生のお目に留まって、比較思想学会の設立へと進んだのであったと思います。いざれにしても浄土宗寺院の住職であり、大正大学で仏教を学ばれ、さらに西洋哲学を専攻され、英語はもちろん、ドイツ語・フランス語・ギリシャ語・ラテン語・サンスクリット語までに通じられたと云われる峰島先生のご活躍の機と場と時と縁とが見事に重なって、先生の生涯が彩られたのであります。

ここでは先生の近代日本の思想史（選集「第2巻」）や西洋哲学と比較思想（第1巻）、比較宗教哲学と仏教（第3巻）の内容にまでは立ち入れませんが。しかし、比較思想学的方法の内実にはその最後に選択というあり方が説かれていて、比較

は対比からさらに進んで主体的な対決へ、そしてさらに根源を見据えた、あるいは根源に促された選択へという、法然浄土教へと昇華された如き提示で終わっています。ところが先生は比較思想方法論の中では法然上人については一言も言及されておりません。しかし先生のご生涯の依りどころは正に法然上人への深信にあったのであり、その信力が田丸先生をして「コンピュータ付きのブルトナー」と云わしめた先生のエネルギーの源泉であつたに違いないと思います。勿論、比較思想学は普遍的で客観的な学問であるから、先生は法然上人のことを正面にはお出しにはならなかつた。その代わりに、近代日本の思想家たちの研究においては、必ずそれらの思想家の倫理と宗教に対する思想を問い、それによつていわば立体的に彼らの思想を再構築して見せたのであります。

前に述べた「仏教の真善美聖」なる書物において、先生は「聖」のパートを担当されましたが、西洋哲学でいうと真善美は知情意の価値であり、その真善美の価値つまり価値の価値が聖であると規定され、さらにその論放の掉尾を次のような言葉で結んでいらつしやいます。「すでに事実と価値を当初より二つのものとしてとらえようとしたのが仏教的でなかつたのである。我々は今、聖なるものの体証、神聖性の示現という生の出来事に直面している。いや、われわれがその出来事そのものである。それは、じつは、これまで縷々として説いてきたような観念的な説述の果てに到りつくようなものではないのである。救済な

いし解説という、いわば一つの事実Ⅱ価値があるのみである。遠きは近くにありとはじめに云つたことは、ここに現成する。そしてあらたな価値観の建設は、ここを起点として開始されねばならない」と。

比較思想学会の大御所であり、浄土宗門の稀代の哲学者であられた先生の法然上人への帰投は、昭和六〇年に執筆された「法然から親鸞へ、親鸞から法然へ」という論攷に見事なロゴスの展相を見せていると思います。普通は法然上人から親鸞聖人へと、善人正機から悪人正機へ、他力から絶対他力へとより深く転換したように解されている事柄について、先生は論理と実証によつて「親鸞から法然へ」というロゴスのダイナミクスを示され、先生の安心のありかを確保されました。

ああ、しかしながら、その時はすでに来てしまいました。先生のお言葉をもつてすれば我々は今「神聖性の示現という生の出来事に直面している」。そしてそれだからこそまさにここを起点として、先生のご遺志を継いで「あらたなる価値観の建設」に取り掛かつていくことをお誓いするものであります。

峰島旭雄先生本当に有難うございました。南無阿弥陀仏。

平成二五年一月二七日

元比較思想学会会長 吉田宏哲 合掌